

第53回全日本中学校国語教育研究協議会

子どもたちが自ら学び、深める授業づくりの実践と改善

普通寺市立西中学校 岡田 桜

1 全体会

① 概要

神奈川大会開催にあたっての基調提案が行われた。本大会に関わる重要な点は、「プロセス重視の学習指導案」から「学びのプラン」という方式を立ち上げたことにある。

これは、生徒を主語にした授業づくりを目指し、教員は授業内においてファシリテーターに徹するというあり方だ。「学びのプラン」とは次に記載するとおりである。

- ①教師と生徒が共有する単元の授業計画
- ②学習指導案は生徒が主語で記述される
- ③生徒が「何を学ぶのか」を理解するため、単元名、目標、評価基準等をワークシートに記載し、授業初めに共有する

これらの定義をもとに各教員が、生徒の視点に立ちながら見方・考え方の過程をシミュレーションしていく。

この学びのプランを実現するために、神奈川県内の国語科教員で共有する仕組みが「ユニット制」という会の持ち方である。これは、各分科会から研究部員を募り、授業者・発表者、指導助言者、ユニットリーダー、ユニットメンバーで構成されている。

各ユニットの研究部員で共通認識を持ち、研究授業の作成に当たることで体系的な学習のプロセスを共有できる。また、ユニットが教師間の情報交換の場ともなっているため、研究の発表者が一人で作り上げるというよりも、チーム一丸となり組んだという意識が芽生える。「オール神奈川」の思想が浸透している。

② 考察

「学びのプラン」という授業形態が神奈川県での国語教育の中で浸透している。今大会で「学びのプラン」という言葉を初めて知ったが、教員と生徒が授業計画を共有するという点に目新しさを感じた。私も、普段の授業で生徒の見通しが立つように前もって口頭で授業の進め方を伝えるときはあるが、毎時間のワークシートに単元の見通しが持てるように記載されているのは参考になった。

また、「生徒を主語にする」という言葉は良く聞いていたが、どのように授業を作っていけば生徒主体になるのか不明確なところがあった。その点については、基調提案にて「いつ、どこで、どのような資質・能力を育成し、どのように評価するのか」ということを、生徒と事前に共有することや「研究授業後に生徒インタビューを実施し、生徒の忌憚ない意見を取り入れる」という説明で明確になったように思う。特に、生徒インタビューという点は、生徒の実際の声に焦点を当てることができるため画期的に感じる。実際の生徒インタビューを公開授業で目にした時も、大人を前に堂々と発表する姿は目を見張った。また、生徒インタビューの代表として、人前で意見を述べた生徒はある種の達成感があるのではないだろうか。自分たちの意見を取り入れて今後の授業に生かされる、という実感はこの生徒インタビューという場で持てるのではないだろうか。そういったこともねらいとして今大会で実施されたのだろうと考える。

また、ユニット制を設定することで、各分科会に所属する教員の役割が的確なことも運営をするうえで大切なことだと感じた。一人ひとりが国語科教育発展に関わっていこうとする意識が根付いていた。

2 授業

① 概要

公開授業 第分科会『『トロッコ』を通して、文学作品の読み方を広げよう!』では、本文中の言葉に注目し、文章の展開や表現について自分の考えをもつことをねらいとする。「学びのプラン」を活用し、単元の見通しを図るとともに、生徒自身が考えの深まりや変容を自覚できるようにする。また、生徒が主語となり授業を進めるために、自身の興味・関心に合わせて選択した問いについて、個人で考えたりグループで話し合ったりする時間を設ける。

教員から提示される問いは①若い二人の大工は悪い大人か。②最後に大人になった良平を描いたのはなぜか。③色彩や風景が描かれる効果は何か。の3つである。問いを選択したあとは同じ問いを選んだ者同士でグループを作り、考えを深めていく。

本時では、教員はファシリテーターの役割に徹し、生徒たち主体で進めていく。他グループの考えについて疑問に思うこと、質問したいことを絞り、お互いに説明し合う場を作る。

② 考察

問い③の「色彩や風景が描かれる効果は何か。」について考えたあるグループでは、「身体の重さと気持ちの重さを関係させる効果」という意見があった。これは、主人公の良平が若い男たちと別れて走り帰る際に自分の荷物を投げ捨て、履いていた草履さえも脱ぎ捨てた場面を読んだ意見だ。「荷物を投げ捨てることで良平は自分の重たい暗い気持ちを軽くさせようとしたのではないか」という内容を本時で生徒は語っていた。本文には良平の心情を示す明確な言葉はない。しかし、これほど堂々と自分の意見を述べるのは普段の授業から発言する機会が十分に設けられているからだと感じる。

また、「一線は重要」という言葉もあった。「国

語の別の単元で、含みを持たせる表現として一線が使われることがあると習った」など、既習事項と結びつけて生徒は発言しており、習ったことをアウトプットして活用する様子も見られた。本文の内容を自分なりに解釈しよう、知りたいと前のめりになって考えられたのは、教員が初めに立てた3つの問いが効果的だったからだろう。③の問いは学級でも読解力のある生徒があらゆる考察をしやすい問いだが、国語を苦手とする生徒ならば抽象的過ぎる問いでもある。そういった生徒は①の「良い大人か悪い大人か」という2択で答えのだしやすい問いに集まる。また、グループで集まった際も、円グラフでパーセントの割合が一目で分かりやすくなっている。意見を持たず、時間を持て余す生徒がでないように問いの内容が工夫されていた。そして、個人→グループ→学級全体の流れをとっているため、取り残されている生徒がいないように感じた。全体共有の際に、多く発言する生徒とそうではない生徒に分かれてはいたが、グループ内の誰かが発言するときは紙を渡したり、頷いたり、指し示して援護するなどの様子も見られた。研究授業の場でも自然とその行動ができるのは普段の授業でも班内の役割について指導しているからだと感じた。

〈 生徒主体の在り方について 〉

今回の研究授業では、緑園学園に別の学校から教員が派遣され5時間のみ授業をするという形態をとっていた。普段と違う教員が来ると、身構えそうなものだが、学級では誰が授業を行なっても生徒主体で発言する雰囲気づくりができていた。しかし、教員がファシリテーターとしてももう少し介入したほうが良かった場面も見られた。例えば、先ほど述べた①の問いでは「良い大人か悪い大人か」というのが論点であるが、生徒の中で良い悪いの基準が曖昧だったと感じる。『『トロッコ』の価値観は現代とは異なる部分もあるので、そこを整理する役割も必要だったと考える。他校で数時間の授業をするという形

式の難しさでもあったと感じた。

〈 生徒の感想 〉

研究協議の中で生徒インタビューの時間が設けられていた。以下質問事項まとめ

①質問 今回の授業で身についた力はなんだと思うか。

①答え グループが中心だったので、司会をする力や意見をまとめる力が身についたと思う。
答え 友達の意見を取り入れて、自分の考えと結びつけて考える力。

②質問 自分の中で変化したこと、気づきはあるか

②答え 今までなんとなく読んでいた物語のなかでも新たな発見ができそう。

二つ目の質問で出た答えがまさしく今回の授業の意義であったと考える。授業の最後のために生徒は振り返りを書いて、「単元を通して、『トロッコ』に対する考えはどう変わったか」という項目では、「若い男は初め悪いやつだと思っていた」という考えから「〇班の〇〇という意見を聞いてトロッコは良平のわがままから生まれたストーリーだと感じた。もう一度初めの場面を読むと男たちは良平に対して優しくかったと思うし、『帰るな』と言われて本当に帰って迷惑をかけるのは自分勝手だ」という振り返りをしていった。

具体的に、注目した班の意見を述べ、もう一度自分で本文を読み直し考えを変えたり深めたりしている。そしてそれを書いてまとめることで、自分の考えの変容を自覚できていた。

〈 自校での実践 〉

もしこの授業を自校で実践するならば、時代背景を押さえておきたい。全体での講義形式をとるといっても、ヒントカードとして配布し、自分で確認しながら学習を進めるように流れを

組みたい。また、光村図書の単元であれば「走れメロス」で応用できるかもしれない。

3 分科会

① 概要

日常生活で情報を鵜呑みにせず、他人の考えや物事を正確に理解するために論理的に判断する姿勢を身につけることをねらいとする。生徒たちの生活には SNS は欠かせない存在となっている。そんな中、トラブルやデマ情報に惑わされず、情報を的確に読み取り精査して自分の考えを形成していく必要がある。今回の発表では一つの授業の一場面についての研究授業ではなく、3年間を見通して組み立てられた授業である。1.2年の課題であった「根拠の適切さを考慮すること」「批判的に読むこと」などを踏まえて第3学年での授業を構成した。限定されたテーマに絞らず題材を設定し複数の資料から文章を批判的に読むことを目指した。

② 考察

まず目を見張るのは資料の多さだった。3年次の題材として使用されていた「作られた『物語』を超えて」は実際比較することが難しい主張の強い文章だと感じる。比較する材料が少ないと意見が偏ってしまうだろう。しかし授業者は、ロイロノートを活用し、多くの資料を生徒に配布していた。資料はグラフやイラストなど視覚的に判断しやすいものやネット広告の形式を模すなど、生徒にとって身近な素材をもとにしていた。適宜自分にあった資料を選ぶ判断力も必要になってくる。資料の配布は、ロイロノート上で行われている。普段からロイロノートを活用している学級ならば、ワークシートを振り返ったり資料を見返したりしやすいことは利点だ。資料とワークシートを同時に見られないのはどうかと感じていたが、黒板に印刷した資料を掲示していたり、紙で配布していたりと学級に合わせて配慮をしていた。

また、3年間を通して授業の見通しを持つということも参考になった。3年間持ち上がりで

学年を担当できたときにしか、実現することは難しいだろうが、1、2年で積み重ねたことを3年で総まとめすることは不可能ではない。例えば、1年生に学習した歴史的仮名遣いなどを2年生でも復習する、など小さな積み重ねが生徒の知識・理解を深める手助けになると感じた。この分科会で発表されていた方の資料内の動画で生徒が「先生の授業を3年間受けていて〇〇というところに気を付けて考えられるようになった。」や「〇〇ができるようになった。」など自分の成長を実感している発言も見受けられた。普段の授業から、教員が大切にしたいことを常に伝え、授業の中で見通しを持たせていることが分かる。

本校で普段行っている授業と照らし合わせて、学ぶべき部分が多かった発表に思う。本校で普段行っている授業では、「分からん。」「無理せん。」などの発言を聞くことも少なくないが、ノートの取り方や演習への取り組み方など継続していることは生徒も自然とできるようになっている。大きな単元で3年間の見通しを持つなどいきなり実践することは難しいが、小さな積み重ねから生徒に意識させることが大切だと感じた。そして、教員自身が生徒に身につけさせた力について明確な考えを持つことが必要だと改めて感じることができた。

4 今後に向けて(R9四国大会)

今回の神奈川大会では、研究協議の持ち方など、非常に参考になる場面が多かった。

分科会ごとにユニットを形成し、授業者に頼り切らない意識をもつことが大切だろう。また、仲多度・善通寺支部での課題も感じることもできた。他校の先生方と話し合った際、神奈川大会におけるユニット制の大切さに注目した。誰もが授業者として公開授業に取り組みたくなるような形態を組織していく必要がある。

- ・ユニットに所属している全教員が授業内容を把握している。
- ・研究協議の際、各グループごとに司会を設置

する。(丸亀支部・仲多度善通寺支部で協力してくれる教員を募る必要がある。)

- ・指導者と会の持ち方などについて綿密な打ち合わせをしている。ユニット制や生徒主体性について共通理解を持っている。